

〔3〕 和 歌

龍馬は又和歌にも相當の技倆を有つてゐた。勿論師に就いて學んだ譯ではなかつたが、父の直足、母の幸子は共に和歌に堪能であつたといふから、不知不識學び得たものであつたらう。龍馬の作として殘つてゐるもの數首を左に擧げる。

文開く衣の袖はぬれにけり

海よりふかき君が御心

世の人はわれをなにともいはゞいへ

わがなす事はわれのみぞ知る

春くれて五月まつまのほとゝぎす

初音をしのべ深山邊のさと

人心けふやきのふと變る世に
ひとりなげきのますかぐみ哉かな

短夜をあかずも啼てあかしつる

心かたるな山時鳥

湊川にて

月と日のむかしをしのぶ湊川

明石にて

うき事をひとり明石の旅衣

淀川を溯りて

藤の花今をさかりに咲つれど

船ふねいそがれて見返みかへりもせず
泉州田川せんしゅうたがはの名産引臼めいさんひきうすを詠よ
引臼ひきうすの如く上下ごとくかみしもたがはば

かゝる憂きめに逢はまじものを

嵐山あらしやまに遊びて

嵐山夕あらしやまゆふべさびしく鳴なる鐘かねに

こぼれそめてし木き々きの紅葉もみぢは

大政奉還たいせいほうくわんの時とき

心こころからどのけくもあるか野のべはなほ

雪ゆきげながらの春風はるかぜぞふく

桂小五郎かつらこに與あふ

行く春はるも心こころやすげに見ゆるかな

✓ V

〔4〕 都々逸

花なき里はななしの夕ぐれの空くう

龍馬りゅうまの作さくとして傳つたへられてゐるものに、都々逸とどまつがある、眞偽しんぎは保證ほじょうが出來できぬ
が、眞まこととすれば、前掲ぜんけいの和歌わかなどよりも遙はるかに優すぐれたもので、世の都々逸とどまつ中なかで
も傑作けつさくたるを失うしなはぬ。

何なにをくよくよく川端柳かははたやなぎ

水みずの流れながを見て暮くらす

咲さくらいた櫻さくらに何故なぜ駒こまつなぐ

駒こまが勇いさめば花はなが散わかる

二ふたつとも最も人口もととじんこうに膾炙くわいしゃしたものである。

修養
史傳 坂本龍馬言行錄 終

大正六年四月一日印刷

大正六年四月四日發行

正價金參拾五錢

第十一編 坂本龍馬言行錄 定價金四十五錢

著者 川又慶二

發行者 伊東芳次郎

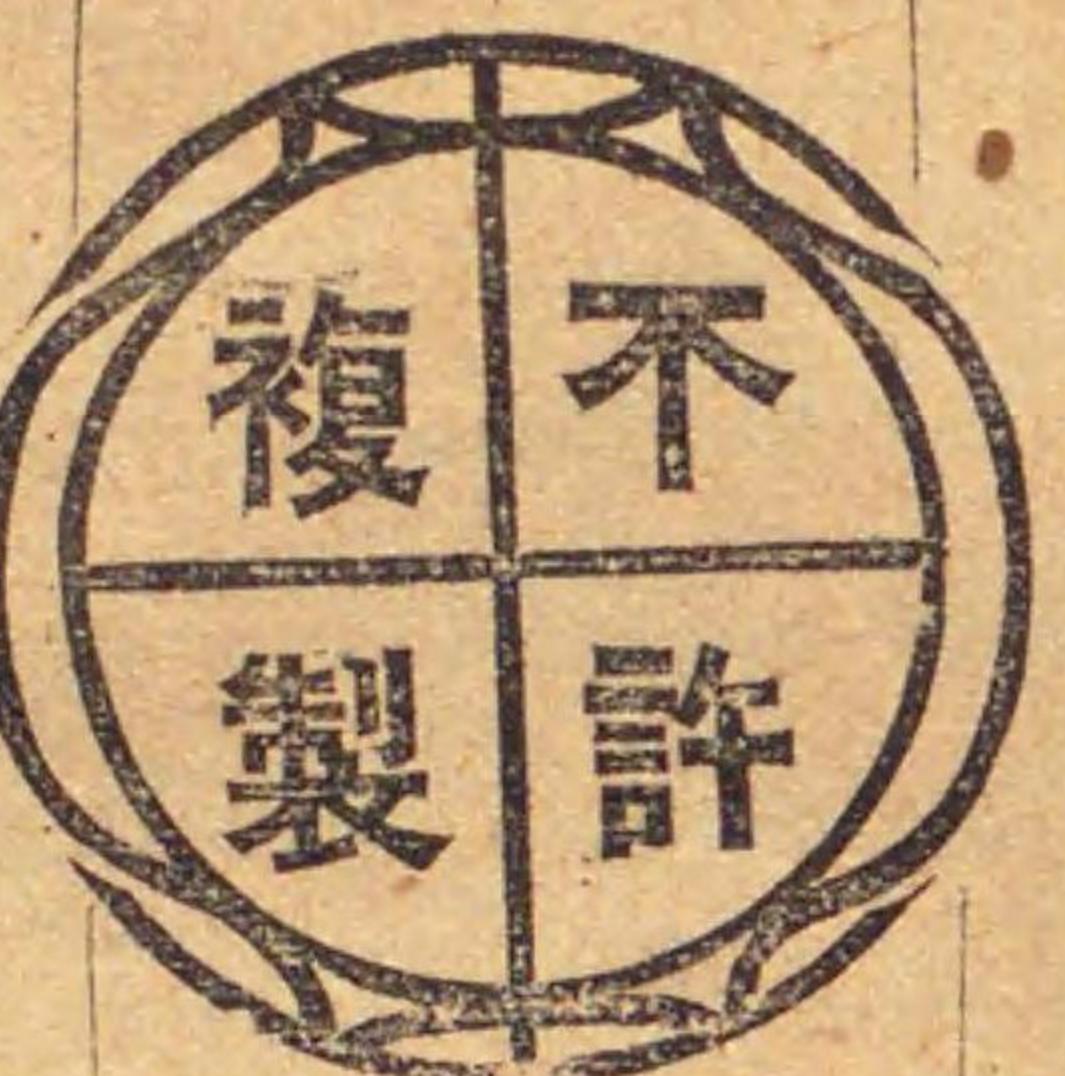
東京市牛込區神樂町一丁目一番地

印刷者 藤澤松次郎

東京市小石川區西江戸川町二十一番地

印刷所 江戸川印刷株式會社

東京市小石川區西江戸川町二十一番地



發行所 東京市牛込區
神樂町一ノ一
電話番号五三七六一七一
振替 東京一七一

東亞堂書房

東亞堂出版圖書特約賣捌店

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同
小石本本麻京京京京日本本本本神神神神神神田田田田

鶴日森森新春東北前目辨文林至有中內二勉試上東京
江聲本江橋祥海隆川黑原平林次斐西慈開屋至松強文田書
分書書書書運

久山同廣同同名神同京同大神同同同同同同同同
留米市島市古屋市戶市阪市奈川市町芝牛込濱市

菊白積友星小川寶寶松盛福第金弘勉第第福岸文同
竹銀善野澤瀬文田三四一島田影文
金日館文百館館有養文強有有屋書
文新支書星架支庄隣隣書
堂店店堂店店店助館社堂堂堂堂店店堂

東亞堂發賣圖書目錄

送券貳錢御附
附券貳錢御
あれは即時贈呈す

大京台富仙青弘秋小札富金新同長宇前長佐同福
岡臺森前田揭幌山澤渴岡宮鶴野賀岡本
連城南町市市市市區市市市市市市市市市市

大日小吉鈴今今石左富中字萬聲目煥煥西大博精
阪韓出木泉泉川文貴田都松張黑乎乎坪善崎
英字堂宮堂堂堂摩文館書
鳳書書華支本書書書書書書書支本書信支
號房店店店店店店店店店店店店店店店店

修養史傳既刊書目

第一編

日蓮大士言行錄

足立栗園先生著

四六判 美本 正價各金參拾錢
各冊紙數百六十頁以上 送費各金六錢

第二編

大西郷言行錄

鈴木郁翁先生著

日本唯一の英傑僧日蓮の面目紙上に躍動す彼が勇猛果敢の行爲は取つて以て青年諸卿の模範たらしむべし之此叢書の第一に此人を選みし所以なり。

第三編

山鹿素行言行錄

足立栗園先生著

身は城山々頭一片の露と消えしと雖も其曠世の大偉業は千古の後までも消ゆることなからむ偉人
大西郷先生之我國の産みたる誇りの一ならずや。
りき栗園先生の麗筆三部の價值ありと云ふべし。

素行は近世思想界の巨人なり文武兼備の偉人なり所謂山鹿流の兵學は當時武人の推奨する所な

第四編 德川家康言行錄

百目木劔虹先生著

江戸幕府三百年の基礎を定めたる東照公の言行は一冊に盡して餘蘊あることなし彼が悠揚迫らず焦らず成功を後日に期せし大志學ぶべく歎すべし。

第五編 吉田松陰言行錄

武田鶯塘先生著

松陰は幕末達眼の士なり其身は小塙原に死せしと雖も彼が大節は毅然として子弟の脳底に傳はりよく維新回天の業を成就せしめたり。

第六編 新井白石言行錄

藤森花影先生著

徳川幕府の大儒白石先生の言行描きて漏らさず勤勉篤學の先生の面目は紙上に躍如たり正に之青年修養の好模範なり。

第七編 貝原益軒言行錄

上田南人先生著

益軒先生の訓言は實に天下の至寶なり先生は實踐の人躬行の人言々行々悉く他を益せしむ益軒の名空しからずと云ふへし。

第八編 佐久間象山言行錄

笛井花明先生著

開國の偉人先見の英雄象山佐久間修理は山國信濃の生みたる大器也笛井先生平生崇拜の餘櫻大の筆を呵して此の熱血文字と成る。

第九編 勝海舟言行錄

淺海琴一先生著

幕府の海軍奉行として又江戸城明渡しの大立物として更に政府の一快傑として其言行の傳ふべきもの多き海舟先生の面目を見よ。

第十編 水戸黄門言行錄

笛岡清泉先生著

水戸第二代の英主黄門光圀は英明の資謹嚴の性夙に尊王愛國の氣を鼓吹して史局を起し楠公の碑を建つ幕府稀世の人傑也。

第十二編以下目下印刷中に有之逐次刊行す。

福 本 日 南 先 生 著

黑 田 如 水

大判 美本 約三百頁
正價 一圓五十錢
送費 十二錢

(國民新聞批評) 戰國英雄中の異彩小東照公如水一生の行動を其心事までに立ち入り縦横自在に解剖し来る如水は著者同郷の偉人之を描くに史的材料の豊富なると例の奔躍飛ぶが如き快筆を以てす油の乗りし好史傳たるや論無し。

福 本 日 南 先 生 著

增補 改版 直江山城守

大判 美本 二九〇頁
正價 一圓二十錢
送費 八錢

(萬朝報批評) 石田三成と刈約して天下を一匡し、家康を仆して太閤の舊業を保せんとして人事を盡し、敗後祿を他に頒つて晩年を風月に囃きたる直江兼續の一生は飽くまで勇ましく清く高し、日南これを日本男兒の典型として天下に紹介す、行文烈々、字々火を噴く、讀むをして兼續たらしめずんは止まざるの勢あり、痛快の著なる哉、

IHD30



